

シンポジウム報告

「移民の社会統合の理念と実践—後発国の比較から」

【概要】

- 日時：2019年1月12日（土）13：30～18：20
- 場所：上智大学四谷キャンパス紀尾井坂ビル112教室
- プログラム

司会：長村 裕佳子（上智大学大学院 博士後期課程）

基調講演：大石 奈々（メルボルン大学アジア研究所 准教授）

報告者

第1報告：伊吹 唯（上智大学大学院 博士後期課程）

「エスニック移民から考える社会統合—『日本人』と『外国人』のはざままで」

第2報告：吉川 春香（慶應義塾大学大学院 修士課程）

「日本における支援団体の機能の再考—中国系ニューカマー二世世代の事例から」

第3報告：川本 綾（大阪市立大学 特別研究員）

「韓国における移民政策の展開—『多文化』政策の光と影」

第4報告：上野 貴彦（一橋大学大学院 博士後期課程）

「スペインにおける間文化主義と住民参加

—後発ながら継続的な政策論議の深化と課題」

コメンテーター：柏崎 千佳子（慶應義塾大学経済学部 教授）

五十嵐 泰正（筑波大学人文社会系 准教授）

【目的】

本シンポジウムは、日本における移民の社会統合のあり方を、日常的な実践のレベルから考察する目的で開催した。その際に、日本と同様「移民後発国（以下、後発国）」といわれる他国における事例を合わせて検討することとした。

【各報告概要】

基調講演の大石准教授は、移民の社会統合についての世界的な情勢を概観した後、オーストラリアにおける状況を事例に、シンポジウム全体の枠組みを提示した。報告では、「先発移民国」であり、多文化主義政策でも有名なオーストラリアよりも、移民受け入れ態勢の整備が遅れているといわれている日本の方が、実は、移民に対する福祉や機会の均等の達成度合いが高い部分もあることが指摘された。

第1、第2報告では、日本の事例が紹介された。第1報告の伊吹は、後発国の特徴といわれるエスニック移民による社会統合に向けた実践を紹介した。この報告では、日本社会のエスニック移民の1つである日系ブラジル三世のライフストーリーを事例として、日本社会との交渉の様子を描き、その過程に現れる緊張関係や「多文化性」と「日本人性」が戦術的に使い分けられることを明らかにした。第2報告の吉川は、分節同化理論をフレームとして、東北地方の中国系ニューカマー第二世代に対する支援団体の機能を検討した。東北地方のある日中国際児支援団体と地域の日本語教室が連携した支援が行われていることを指摘し、それには、中国系ニューカマー第一世代の母語や母文化継承の場があり、マジョリティとの信頼関係が結ばれていることが必要であると論じた。

第3、第4報告では、日本と同様に後発国といわれる韓国とスペインの事例が報告された。第3報告者の川本は、韓国における多文化家族政策が、結婚移住女性とその子どもたちの支援に集中しており、外国人労働者や華僑はその対象ではないという移民の選別が起きていることが何を意味しているかを検討した。また、生活者である移民の視点からの韓国の移民政策の検討も試みている。仁川華僑や国際結婚移住女性などに対する質的調査の結果から、移民の選別によって移民の階層化と二重の排除の状態が生まれていることを指摘し、移民のライフコースや世代などを考慮した政策の必要性を提唱した。そして、上野による第4報告では、スペイン社会において、どのように間文化主義政策が可能となったのかが、バルセロナとビルバオの2都市を事例として論じられた。政策が形成される過程においては、規範的同型化と模倣的同型化が進んでいったことを指摘した。また、実践においては、移民に対する偏見を減らすための「反うわさ」政策が、専門家が主導する「表舞台」の規範的同型化の一方で、日常的な実践である「裏舞台」の分岐を伴って進んでいることを論じた。

【ディスカッション概要】

コメンテーターからもフロアからも、各報告とシンポジウム全体の枠組みに関して質問やコメントが挙げられ、予定時間を超えてしまうほど活発な議論が行われた。そのなかで特に論点として挙げられたのが、「後発国」という枠組みについてであった。日本や韓国には在日コリアンや韓国朝鮮族などの人々がおり、1980年代以降に移民が急増したという後発国の移民受け入れ動向とは当てはまらない側面も持つ。そのことから、日本や韓国を「後発国」とすることができるのか、その場合何をもって「後発国」とするのか、そもそも「後発国」という枠組みはどこから出てきた枠組みなのか、といった質問が出された。加えて、移民の受け入れ時期の問題だけでなく、そのような人たちを受け入れてきた歴史と経験があり、後発国という枠で論じてしまうことが、その歴史性を軽視することに繋がるのではないかという懸念が示された。

【反省点・所感】

反省点は、以下の3点である。1点目に、時間配分である。当初の予定では13:30から

18:00であったが、各パートの時間配分に余裕がなかったことで、途中で調整することが難しく、結果的に20分ほど予定終了時間を超過してしまった。2点目に、ディスカッションのタイミングと時間である。参加者からのアンケートにも、報告の合間にディスカッションの時間があつた方が良かったという指摘があつた。長時間にわたるシンポジウムであつたため、フロアとのインタラクションをどのタイミングで取るかやその時間についてもう少し工夫することで、より参加型のシンポジウムにできたのではないかと思う。3点目に、広報についてである。アンケートを見ると、今回会場に足を運んでくださったのは、主に報告者から直接案内を受けた方々だつた。それでも、予想よりも多くの方に参加していただいたが、より広い範囲に情報を届けるために、次回以降は学会のネットワークなどを上手く活用できるようにしていきたい。

以上のような反省点はあるが、当日の議論は濃密なものとなつた。ディスカッションのなかで十分にリプライすることができなかつた点はあるが、その点については、今後、論文執筆などの際に活かしていきたい。今回のシンポジウム企画を通して、若手研究者同士のネットワークだけではなく、移民研究ですでに活躍されている研究者の方々とのつながりも構築することができた。基調講演者、コメンテーターとして来ていただいた先生方も、以前よりお話を伺いたいと考えていた先生方だつたため、今回、研究科よりこのような機会と支援をいただき、シンポジウムを実現できたことを感謝したい。